

非麻痺側で麻痺側の模倣を行い訓練の志向性が変化した左片麻痺の一症例

○高見 宏祥¹⁾ 余語 風香¹⁾

1) 新札幌パウロ病院

【はじめに】

今回、左片麻痺患者の歩行に対する訓練で、非麻痺側で麻痺側の模倣を行い左右比較したことで、訓練のモダリティに注意を向けて知覚仮説に変化がみられた症例について報告する。

【症例紹介】

右橋梗塞を発症し左片麻痺を呈した60歳代男性。Br.stage下肢IV。左下腿三頭筋と後脛骨筋の伸張反応の異常がみられた。机上の注意機能評価に問題はみられないが、行為場面で左上下肢に内的な注意が低下していた。歩行はT字杖介助歩行で反張膝歩行となっていた。

【プロフィール】

左前足部の圧覚・重量覚の認識は乏しく、立位で他動的に骨盤の移動を誘導すると、各関節の運動方向や大きさを答えることはできるが、足底圧中心の移動と下肢の各関節の位置関係の複数の情報を統合することが困難であった。反張膝歩行について自覚されているが、「どうしても右手に頼ってしまう」と記述していた。また、訓練過程で下腿の伸張反応の異常を制御できるが「なぜあの訓練をしているのかが解らない」と他の担当セラピストに話していた。

【病態解釈・治療計画】

踵と骨盤の位置変化による前足部への圧覚情報の統合が乏しく、下腿の前方引き出しが不十分で反張膝歩行となっていると考えた。訓練に必要なモダリティに注意を向けて、適切な知覚仮説を想起してもらう為に、訓練前に非麻痺側で麻痺側の模倣を行い、左右の差異の自覚を促した。

【訓練】

立位で左下肢の立脚中期にかけての模倣を右下肢で行い、足底圧覚情報の前後の変化やそれに伴う各関節との位置関係について問いをたてた。「右は足首を動かすのではなく、重心（骨盤）を移動する」との差異を自覚し、下肢の各関節の位置関係を認識させるグローバルな訓練の意図も記述させ、知覚仮説を行い実施することができた。

【結果】

下腿の前方引き出しが生まれ、反張膝歩行が軽減され、T字杖歩行を獲得した。

【考察】

今回、非麻痺側で麻痺側を模倣させることで、訓練に必要な情報を能動的に探索させた。結果、訓練のモダリティに注意を向けて知覚仮説を想起する事ができ、問題点の自覚が生まれ、その後の訓練による歩容の改善の一助となった可能性が示唆された。

【倫理的配慮、説明と同意】

当医療法人の発表に対する承認、及び本人に書面にて説明し許可を得た。